

10th 世界文化遺産登録 明治日本の産業革命遺産



2015年7月に世界文化遺産登録された「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」。2025年7月で10周年を迎えました。鹿児島県には、23の構成資産のうち「旧集成館」（反射炉跡、旧集成館機械工場、旧鹿児島紡績所技師館などを含む）、「寺山炭窯跡」、「関吉の疎水溝」の3つの構成資産があります。今の日本の礎となった、先人たちが築いた文化遺産へ会いに、時空を旅しましょう！

江戸時代、欧米諸国の脅威に対抗するため、洋書を片手に造船や製鉄などの近代化を自分たちの力で進めたのじゃ。私の想いは後世に引き継がれ、日本はわずか50年で急速な産業化を成し遂げることに。それでは、当時の「集成館事業」の全貌を、ぜひご覧あれ！

薩摩藩第11代藩主
島津斉彬

集成館事業とは？

島津斉彬によって始められた、日本初の西洋式工場群「集成館」を中心に展開された事業のこと。薩摩焼など薩摩藩の技術も活用。島津家の別邸があった磯地区に、たくさんの工場が建てられました。

関吉の疎水溝
【第一期集成館事業】

集成館事業初期は、蒸気機関の導入前で、高炉の稼働や大砲の製造などを水車動力に頼っていました。ただ、磯地区には大きな川が無かったため、背後の吉野台地から水を引いて活用。崖の落差を利用して水に勢いをつけていました。

水車

水車の動力で風を送り、溶鉱炉内の温度を上げ、鉄を溶解。また、鑄開台でも水力が活用されていました。

さんかいだい
鑄開台
水力で大砲の砲身に穴を開けていました。

溶鉱炉

砂鉄や鉄鉱石を溶かして、鉄を造る炉。

寺山炭窯
【第一期集成館事業】

鉄を溶かす燃料となる石炭が採れなかったため、代わりとなる木炭を作っていました。火力の強い白炭（しろずみ）を製造しました。

集成館反射炉
【第一期集成館事業】

軍事力を強化するために、鉄製の大型の大砲の製造に取り組みました。鉄を反射炉で溶かして、大砲の砲身を造りました。

鹿児島紡績所

日本初の洋式紡績工場。職工200人が1日10時間働き、わずか1年で蒸気機関を動力とする洋式紡績の技術を習得しました。

オランダやイギリスから輸入した、最新式の機械を工場内に設置。蒸気機関の動力で駆動し、金属加工や船舶装備などさまざまな部品を製造しました。

集成館機械工場
（現 尚古集成館本館）
【第二期集成館事業】

鹿児島紡績所技師館
（通称「異人館」）
【第二期集成館事業】

鹿児島紡績所で指導にあたった、イギリス人技師たちの宿舎。和洋折衷の建築様式が特徴です。技師たちはイギリスから家具や日用品を持ち込んで生活を送りました。

The current road to Kagoshima